

学舎長日記

2018年1月15日、一羔会・小諸学舎を支え続けた花岡淑さんの葬儀が、キリスト教会で行われた。説教の中で、生前愛用の聖書より御言葉(みことば)が読み上げられた。後ほど聖書を拝見すると、線が引かれ、一言一言確かめられた様子が伺え、讃美、感謝などの祈りが今にも聞こえてきそうに思えた。

(ルカによる福音書第15章)

1-さて、取税人や罪人たちが皆、イエスの話を聞こうとして近寄ってきた。

2-するとパリサイ人や律法学者たちがつぶやいて、「この人は罪人たちを迎えて一緒に食事をしている」と言った。

3-そこでイエスは彼らに、この譬(たとえ)をお話しになった、

4-「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。

5-そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、

6-家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うであろう。

7-よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。

この御言葉は、法人理念の「一羔なる思い」を表している。当時、学問的にすぐれ高い地位にあった人々に「九十九匹と一匹」のたとえを語るこの話はよく知られている。いなくなった一匹を捜し、見つけ出し、連れ帰り、喜び合うおこないは、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くした社会福祉実践の大切さを思い起こさせてくれる。

1971年発行の一羔(創刊号)には、「私の隣りにいろいろなことで苦しみ、悩み、また泣かされ、もだえている人がいて、たまたまそれをはっきり誰かに訴えることができない人であったので、私はそれを知って黙っておれなくなった。」と運動の思いが綴られた。そして、一人ひとりの存在を大切に支え合う運動が始められる。

舎生からは「花岡のおばさん」と呼ばれ親しまれていた。旅行の付き添いやレストランでご馳走していただくこともあった。突然の訃報に駆け付けた舎生は、不慣れな仕草で一札し遺影の前に献花をした。その時、一人ひとりの舎生に写真の花岡淑さんが温かい眼差しで微笑まれているように思えた。(小松) <一羔ニュース第534号より>